

歴史から見る移民の変容と共生 —ノルマン移民と日系移民—

[山代 宏道](#)

はじめに

移民のアイデンティティーの変容と共生の問題を見ていきます。私は、歴史学は時空間移動をする学問だと思っています。研究するテーマや地域についての知識や理解と共に、異なった場所や時代に生きる人間に対する共感や感受性を養うことを目指します。



TSS 文化大学で講演する筆者

中世ヨーロッパ史を専門としていましたが、2007年、毎年外務省に招聘されている日系アメリカ人リーダーたちが広島で開いたシンポジウム「岐路にたつ日系アメリカ人—過去・現在・未来をつないで—」でコーディネーターを務めた時から、日系アメリカ人、特に日系ハワイ移民の歴史について研究を続けています。

ここでは、移民を「歴史において移動した人々」とゆるやかに捉えておきます。

1 中世ヨーロッパのノルマン移民

ノルマン人とは、9・10世紀のヨーロッパで活躍したスカンディナヴィア(北欧)出身のヴァイキングたちの一派でフランスのセーヌ川河口地域に定住した人々の子孫です。ノルマン人とは「北方



ノルマン人の移動地図

イングランドのノルマン人がリーダーシップと独創性(騎士制度、封建制度、築城等の統治技術や軍事技術など)に優れていたのは、ノルマンディー公以下多数が移住し、移動距離も短くノルマン人としてのアイデンティティーは強かったし、初めから支配者として自分達の独自性を発揮できたからです。南イタリア・シチリアのノルマン人が適応力と同化力で顕著なのは、かれらの移住集団は少数で定住形態も当初は傭兵であったこと、移動距離は長く、母国と結びつくアイデンティティーは弱かったし、支配者となってからも、現地の役人を採用し続けたからです。結果的に民族的・文化的共生が実現しました。

2 ハワイの日系移民

日本からの移民は、1868年(明治元年)に150名ほどがハワイへ渡りましたが、かれら「元年者」の定着率は悪かったようです。農作業に不慣れで、経営者と賃金や労働条件で対立したりした結果、満期後ほとんどが農場を去りました。

1885年日本からの移民が再開されます。ハワイ政府が金を出し、日本政府が斡旋した移住者は「官約移民」と呼ばれました。1894年から移住の斡旋は民間会社に委託され、移住者は「私約移民」となります。労働者は農場主と契約を結び、渡航などに伴う諸経費を負担してもらう代わりに、3年間はその農場主に拘束されて逃亡は許されませんでした。

1900年に「契約移民」制度は廃止され、1907年までは「自由移民」の時代となります。1880年代の初めには全サトウキビ労働者の1%にも満たなかった日本人労働者の数は、10年後には60%を超え、1902年には70%となっていました。1908年以降は、「呼寄移民」時代に入り、日本からの新たな移民は制限され「帰米」者や呼び寄せ者でなければ入国が認められなくなります。1924年の日系移民禁止法まで、ハワイへの移民は約22万人でした。

3 移民の変容

1) 移民動機

ノルマン移民は、経済的動機や政治社会的キャリアアップを移動目的としていましたが、日本からハワイに移民した人びとの大半は、主に経済的な理由で故郷を離れました。広島や山口などの中国地方と、熊本、福岡、沖縄などの九州出身者が多くいました。1880年代、これらの地域の景気は悪く、ハワイでは3年間で400円もの金を貯めることができるという話に飛びついたようです。現実には休みは週に1日、月給10ドル足らずの給料でしたが、山口県大島郡や、広島市の仁保や佐伯郡では最初の移民が成功すると芋ズル式に増加していきました。



ハワイへの日系移民

移民たちと母国との結びつきでは、ノルマン征服後のイングランドで、ノルマン移民の第一世代が、建設した修道院を母国ノルマンディーの教会や修道院に寄進しているのが注目されます。日系移民の一世も郷里の小学校にテレビやピアノのような備品を寄付したり、神社や寺へ献金しています。移民の第一世代は、母国の方を向いていたわけです。

2) 日系アメリカ人

ノルマン移民は、地中海の真中のシチリアで異民族接触をくりかえし、支配者となってからは多文化社会での共存政策をとっています。太平洋の真中のハワイでは、戦後になっても「日系人」に対する偏見はありましたが、政治的にも経済的にも無視できなくなっていました。1954年ハワイ議会選挙では日系人14名が当選し、ハワイ州に昇格した1959年にはダニエル・イノウエが連邦下院議員に、62年には上院議員に当選しています。

日系移民は日米戦争を契機に「日系アメリカ人」へと急速に変化しました。日本軍による攻撃がきっかけで、「アメリカ人」としての意識を強く持ち始めたわけです。

移民を、ノルマン人や日本人として母国の歴史の中に位置づけるのか、移住先の歴史の中に位置づけるのかは重大な問題です。出て行った移民達が自分たちを、どのように見ているか。イタリアのノルマン人たちは、自分達の母国における出自については、歴史書に記録させていません。



ダニエル・イノウエ議員

現在のハワイの日系人は3世あるいは4世以降がほとんどです。かれらは「日本人」ではなくハワイの「日系」あるいは「アジア系」アメリカ人です。

4 多文化共生をめざして

これからの世界ではグローバル化が進み、人の移動が激しくなります。異文化をもつ人々が接触し、多文化社会が到来します。人の移動と定住の問題、言い換えれば、移民問題は、ある社会におけるマイノリティー問題やアイデンティティー問題を引き起こします。そして共生の実現が課題となります。

ワシントン州立大学歴史学准教授川村のり子「平和と共生を求めて—歴史から観る真珠湾と広島との和解」は、パールハーバーとヒロシマとの歴史的和解の可能性を問う論文で、ナショナル・メモリー(国民的記憶)のギャップを指摘しています。アメリカ側が1945年8月6日原爆投下までの戦争記憶もつものに対して、日本側(被爆者)が原爆投下以後の記憶を持ちがちです。平和・共生のためには国家レベルを乗り越えたトランスナショナルな視点や発想が必要だと主張しました。

歴史的過去を決して忘れることなく、同時に、過去の行為をお互いに許せるか。多文化共生の実現のためには「和解」がキーワードだと思います。

最も多くハワイに移民した広島県民の体験をふり返りつつ、真珠湾(リメンバー・パールハーバー)からヒロシマ(ノー・モア・ヒロシマ)への戦争過程を捉えてみましょう。広島の人々が両方の悲劇的出来事の歴史的和解のための媒介項となれるのではないのでしょうか。広島移民は、日米開戦により、家族が分裂したり、親族が戦争犠牲者や被爆者となっています。移民を母国の歴史あるいは移民先の歴史だけではなく、移民自身の歴史として描くことが必要です。真珠湾もヒロシマも広島移民の継続した歴史の中に位置づけることが可能です。

だれによる和解かが問われるべきです。国家、元兵士、一般市民のレベルでの和解が考えられます。日米の国家レベルでは、日米安全保障条約にもとづく軍事的同盟関係が成立しており和解は達成されていると言わねばなりません。

元兵士の間では、1995年、終戦から50年目に日本から真珠湾攻撃に参加した元兵士とアメリカ側元兵士たちがホノルルで交流し友好の碑を建てています。部分的にでも和解が成立しました。



日米元兵士による友好の碑

戦争中の日系移民や日系アメリカ人の強制収容に対する正式の謝罪と賠償金支払いを政府に求めた「リドレス運動」で日系人集団とアメリカ政府とのあいだの和解が実現しました。それは1988年レーガン大統領のとき、政府が謝罪と賠償金(一律2万ドル)の支払いを決議することで、日系アメリカ人のアメリカ社会への受容を公式に行った「儀式」であったと思います。

日系人がアメリカ人として社会的に認められました。日系アメリカ人として承認されたのです。すなわち、共生が可能になったわけです。この運動の成功には、他のエスニック(民族)グループからの支援があったことに注目すべきです。

ネガティブなアイデンティティーしか持ち得なかったのが、日系アメリカ人としてポジティブなアイデンティティーを持つことができました。自己肯定(受容)への過程により、はじめて他者との関係を築くことができるようになったわけです。2001年同時多発テロ(9.11)直後のイスラム系の人々のための行動に見られたように、日系アメリカ人は、他のマイノリティーへの支援活動へと積極的に関わっていきえるようになったのです。

おわりに

パールハーバーとヒロシマを、家族史や個人史のなかに位置づけ、それらを受け入れるために、個人や国家レベルでの努力(賠償や教育など)がなされることが重要です。また、次世代(若い人々)間の交流が必要です。それは、和解のための平和教育の問題ですが、ナショナル・メモリー克服のためには、次世代の教育が有効でしょう。交流活動において、相手から質問されて初めて自分の文化や歴史について十分に知らないことを自覚する機会も得られるからです。

多様なものの見方、多様な文化や価値観があるなかで、他者との関係の中で生かされているという考え方ができるようになるならば、それは、多文化共生社会を実現する助けとなります。日系移民、そして日系アメリカ人の体験は、われわれにそのことを語ってくれています。

文献リスト

川村のり子「平和と共生を求めて―歴史から観る真珠湾と広島との和解」植田隆子・町野朔編

『平和のグランドセオリー序説』風行社、2007。

矢口祐人『ハワイの歴史と文化―悲劇と誇りのモザイクの中で―』中公新書、2002。

山代宏道『中世ヨーロッパの時空間移動』(共著)溪水社、2004。

山代宏道監修『日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム報告書「岐路にたつ日系アメリカ人―過去・現在・未来をつないで―」』国際交流基金日米センター、2007。

山代宏道「日系アメリカ人の和解とアイデンティティー」『西洋史学報』39号(2012年) pp.41-68.

(本稿は、2013年9月17日に行われたTSS文化大学における講演の概要です。)